

コロナ禍の別離

旭川市医師会
森産科婦人科病院

ひだか やすひろ
日高 康弘

父の一周忌が終わった。来月には納骨を控えている。享年81歳。父は48歳で脳出血による片麻痺となった母と二人で暮らしていたが、父も63歳で認知症となり、16年前から二人で介護施設に入居してもらっていた。

父は誤嚥性肺炎で3週間入院治療を受け、リハビリのために別の病院へ転院。リハビリに励んでいたようだが2週間後に急逝。夜の部屋回りで心肺停止の状態で見られ、心肺蘇生には反応しなかった。主治医だった同期の医師が死後CTを撮ってくれた。腸管穿孔による敗血症性ショックの診断だった。父の表情から最後は苦しまず眠るように逝ったようだった。コロナ発生からの2年半は介護施設の面会も制限され、差し入れを持っていった時に顔を合わせる程度しか会っていなかった。最後に会ったのは転院で介護タクシーで移動した時の数分だけだった。

父は元気な認知症だった。人の言うことを聞かず困ることが多々あったが、介護施設の入居者の中ではかなり若い方であり、夏は畑や花壇の手入れ、冬は除雪作業させてもらっていた。若い頃から体を使う仕事をしてきた人なので、作業をさせてもらうことで認知症や老化防止には良かったようだ。私たちに口では「こき使われる！」と文句を言いながらも仕事ができることに満足していて充実した日々を送っていたようだった。コロナ禍になり感染対策で入居者が屋外に出ることが禁止され父の作業もできなくなった。代わりに施設内の清掃作業を始めた。廊下を掃いたりしていたが、下を向いての作業なので腰が曲がってしまった。面会もできなくなっていた時期なので、1年くらいで90度近く腰が曲がってしまったのを知って驚いた。屋外作業をしていた時ほど仕事もないため認知症は悪化してきて、そんな中、誤嚥性肺炎となり緊急入院となった。コロナで面会はできないため退院・転院が決まるまで病状は全く分からずにいた。

コロナ禍でなければもっと長生きできて、屋外作業を続けられて充実した日々を生きられたかもしれない。入院して面会もできず寂しい思いをさせただろう。私も父にもう少し何かできたかもしれない。残された母は一人介護施設で過ごしている。今も面会には制限があるが、週末には差し入れを持って行き、母との残り少ない時間を悔いのないよう過ごしたいと日々考えを巡らせている。

揺らぐ内科診療のサステナビリティ

北海道大学医師会
北海道大学病院

いしもり なおき
石森 直樹

2018年春に「新」専門医制度が導入され、早くも5年が経過した。導入前には時の厚生労働大臣から制度運用に関する注文が出され、波乱含みの展開であった。当時、本制度を統括する日本専門医機構は、「新制度を運用しながら問題点を洗い出し、適宜修正しながら、より良い制度を作り上げてゆく…」と説明がなされていたが、現状はどうであろうか？

新制度導入によって内科・外科など19基本領域の専門研修は、到達目標と研修プロセスが厳密に設定される「プログラム制」となった。内科専門医の取得を目指す専攻医は、3～4年の研修期間で、直接担当した症例の中から内科学会が定める方法（J-OSLERと呼ばれる研修実績の登録・評価WEBシステム）を用い、少なくとも160症例の概略を登録し、そのうち29症例は詳細な考察も加えた病歴要約を作成し、最終的に外部査読者より承認を受けなければならない。

今回、新制度下での研修実態を把握するため、当院内科専門研修プログラム修了者を対象として、アンケート調査を実施した。詳細については別稿^{1,2)}に譲るが、全修了者の半数の44名から回答を得た。その結果、WEBシステム上で症例登録に要した時間は1症例あたり（中央値）30分、さらに病歴要約の作成には1症例あたり（中央値）300分が費やされ、前述の研修修了要件を満たすには、実に225時間（中央値）が費やされている実態が明らかになった。

新制度導入の目的として、幅広い臨床経験にもとづく「より良い臨床医の育成」が掲げられていたが、修了要件を満たすためデスクワークに多くの時間が割かれ、ベッドサイド診療にマイナスの影響が生じていることは否めない。新制度導入後の内科専攻医数は全国的に概ね横ばいで推移しているが、首都圏で増加している一方、地方では減少傾向にある。特に北海道ではその傾向が顕著で、2023年度に新規採用した内科専攻医は全道で70名と前年度にくらべ19名の減少である。このトレンドには様々な要因が複雑に絡んでいると思われるが、内科診療のサステナビリティを維持してゆくためには、危機的な状況に現在直面していることを認識し、様々な場面で議論を深めてゆくことが今まさに求められているのではないだろうか。

- 1) 小野澤真弘、石森直樹、豊嶋崇徳 内科専門医登録システムJ-OSLERによる症例登録の実態調査 第55回日本医学教育学会大会2023. 7. 20（長崎）
- 2) メディカルノート 2023. 9. 4 公開 https://medicalnote.jp/nj_articles/230829-001-WA